

Robotics Report

新たな常識のはじまり

世界で進む 「好奇心」を持ったロボット・AI開発

nikko am
fund academy



「好きこそ物の上手なれ」という言葉があるように、好奇心は人間の脳を活性化させ学習や成長を促す大きな要素のひとつとされています。昨今、その好奇心をロボットやAI(人工知能)に植え付け、人間のように自ら学習していく機械を生み出そうという動きが活発になり始めています。

■ 人間のように自ら学ぶロボット・AI開発がトレンドに

米IT大手・フェイスブックが本社内に新設した研究所では、リシンク・ロボティクス社のロボットアーム「Sawyer」を使って、自ら学習して動き方を学ぶロボットを開発しています。

同研究の目標は、ロボットに明確な最終目標を与えずに学習させることで好奇心を持たせ、臨機応変に行動する機械を生み出すこととされています。

ロボットが好奇心を持つことは、例えば子供が新しいことを始める時に、さまざまな動作を繰り返し、結果として何が起こるのかを確かめ、学習することと同じです。

つまり、ロボットに合理的ではない動きも試せる自由を与えて学習させることができれば、周辺環境への順応性がより高まると考えているのです。



※写真はイメージです

■ なぜ、人間はロボットに好奇心を持たせたいのか

従来のロボットは、プログラミングによって決められた動作を忠実に再現できるのですが、とっさの判断や常に変化する周辺環境に適応することができません。

これは、AIは現実には起こりうる問題のすべてには対処できない、といった「フレーム問題」があるからです。そのため、決められたタスクを処理するという役割しか果たすことができていないのです。



※写真はイメージです

一方で、今後は自動走行車やコミュニケーション・ロボット、協働ロボットなどが、人間社会に深く関わっていくことになるでしょう。そして、交通事故の事前予測や人間の安否の判断、異なる形状の材料を瞬時に見極める能力などが必要となります。

そのためには、「自分で考える力」が必須で、その源泉として「好奇心」が注目されているのです。

日本の学界関係者は、2～3歳ほどの知能を持ち、家事や仕事を軽度サポートするロボットが数年以内に登場することは十分に可能だ、といいます。

さらに前述の研究が進めば、人間の暮らしや安全を自ら判断するロボットが登場するのも、そう遠くはないのかもしれない。

上記銘柄について、売買を推奨するものでも、将来の価格の上昇または下落を示唆するものでもありません。また、当社ファンドにおける保有、非保有、および将来の個別銘柄の組み入れまたは売却を示唆するものでもありません。

(当レポートは、株式会社ロボティアの情報をもとに日興アセットマネジメントが作成しています。)

■当資料は、日興アセットマネジメントがロボティクスに関する情報についてお伝えすることを目的として作成したものであり、特定ファンドの勧誘資料ではありません。また、弊社ファンドの運用に何等影響を与えるものではありません。なお、掲載されている見解は当資料作成時点のものであり、将来の市場環境の変動等を保証するものではありません。■投資信託は、値動きのある資産(外貨建資産には為替変動リスクもあります。)を投資対象としているため、基準価額は変動します。したがって、元金を割込むことがあります。投資信託の申込み・保有・換金時には、費用をご負担いただく場合があります。詳しくは、投資信託説明書(交付目論見書)をご覧ください。